

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 7 号について
平成 2 2 年度病虫害発生予報第 7 号を発表したので送付します。

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 7 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
施設野菜全般	1 アブラムシ類	やや多	2
	2 ハスモンヨトウ	やや多	2
	3 タバココナジラミ類 (タバココナジラミハイタイプ [®] Q及びシルバーリーフコナジラミ)	やや多	3
冬春きゅうり	1 ベと病	やや少	3
	2 うどんこ病	並	3
	3 褐斑病	並	3
	4 ミナミキイロアザミウマ	並	4
冬春ピーマン	1 斑点病	並	4
	2 うどんこ病	並	4
	3 ミナミキイロアザミウマ	並	4
冬春トマト	1 葉かび病	並	5
	2 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年と同程度	5
	3 タバココナジラミ類	並	5
冬春いちご	1 うどんこ病	並	5
	2 炭疽病	多	5
	3 ハダニ類	やや少	6
	4 アブラムシ類	多	6
かんきつ類 (露地栽培)	1 ミカンハダニ	並	6
茶	1 カンザワハダニ	並	6

○ 作物の生育状況 (10月中旬)

冬春きゅうり、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春いちごは定植～生育初期、うんしゅうみかんは収穫期、中晩柑(日向夏)は果実肥大期、茶は秋芽生育期であった。

○ 向こう1か月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、気温は高い確率50%、降水量は多い確率40%、日照時間は少ない確率40%と予想されています。

(1 か月予報 鹿児島地方気象台10/22発表)

○ 発生予報の根拠および防除対策

施設野菜全般

1 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における冬春いちごの発生面積率69.3% (平年29.3%)、寄生株率21.4% (平年4.7%) はいずれも平年より多である。
- (2) 冬春きゅうり、冬春ピーマンは発生未確認である (平年の発生面積率：きゅうり0.8%、ピーマン0.0%)。
- (3) 黄色水盤での誘殺数 (佐土原) は、9月末以降平年より多い状況で推移している。

[防除上の注意]

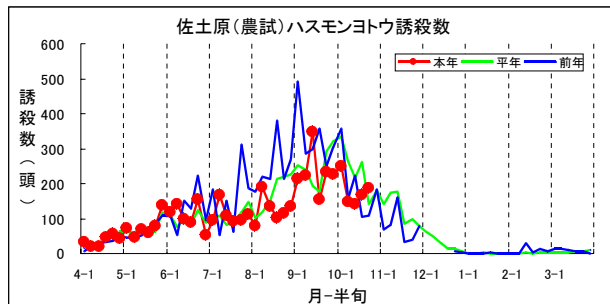
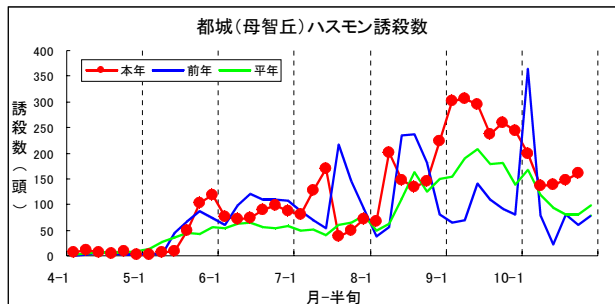
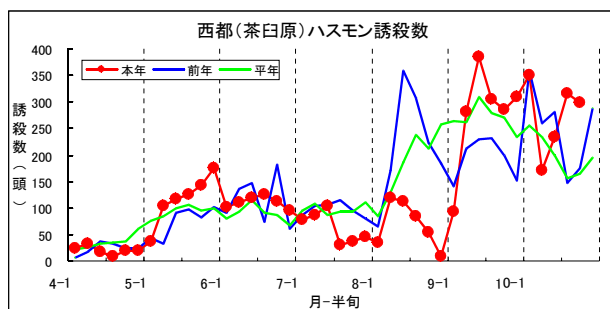
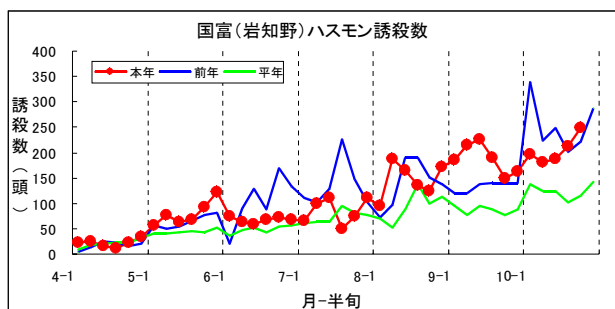
- (1) きゅうりやピーマン等多くの作物でウイルス病を媒介するので、有翅虫の飛来防止に努めるとともに、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を定期的に行う。

2 ハスモンヨトウ (やや多)

平成22年度病害虫防除情報第5号 (9月28日発表) 参照

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における冬春きゅうりの発生面積率54.6% (H21: 38.5%、H20: 42.9%)、被害葉率2.3% (H21: 1.4%、H20: 1.0%) はいずれも前年、前々年より多い。
- (2) 冬春ピーマンの発生面積率15.4% (H21: 0.0%、H20: 42.9%)、被害株率0.5% (H21: 0.0%、H20: 1.8%) はいずれも前年より多い。
- (3) 冬春トマトの発生面積率16.6% (平年16.2%)、被害株率0.9% (平年0.6%) はいずれも平年よりやや多である。
- (4) 冬春いちごの発生面積率46.2% (平年54.8%)、寄生株率2.3% (平年5.7%) はいずれも平年並である。
- (5) 向こう1か月の気温は、高い確率50%と予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くと考えられる。
- (6) フェロモントラップの誘殺数は、9月以降平年より多い状況で推移している。



[防除上の注意]

- (1) 幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若令幼虫期に防除する。

- (2) 施設内で発生すると、天敵類が少ないことや施設内気温が高いことから、増殖しやすくなるので注意が必要である。

3 タバココナジラミ類 (タバココナジラミ、ハイタイク、シルバー-リーフコナジラミ) (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における冬春きゅうりの発生面積率81.8% (平年48.9%) は平年よりやや多、100葉虫数6.1頭 (平年5.2頭) は平年並である。
- (2) 冬春ピーマンの発生面積率61.5% (H21: 38.5%、H20: 42.9%)、100葉虫数3.4頭 (H21: 2.2頭、H20: 2.7頭) はいずれも前年より多い。
- (3) 冬春トマトの発生面積率41.7% (平年36.0%)、100葉虫数1.0頭 (平年1.8頭) はいずれも平年並である。
- (4) 向こう1か月の気温は、高い確率50%と予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くと考えられる。

[防除上の注意]

- (1) 施設開口部には必ず防虫ネットを設置して、施設内への侵入を防止する。設置する防虫ネットは、目合い0.4mm以下のものが有効である。
- (2) 施設内には黄色粘着板等を設置し、早期発見に努めるとともに本虫の密度を抑制する。
- (3) 多発してからでは防除が難しくなるので、発生を確認したら早めに防除する。なお、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (4) 施設内外の雑草は、タバココナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。

冬春きゅうり

1 ベと病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、発生未確認である。
(平年値: 発生面積率9.7%、発病葉率0.9%)

[防除上の注意]

- (1) 湿度が高いときに発生しやすく、激発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における発生面積率27.3% (平年21.2%) は平年よりやや多、発病葉率1.3% (平年1.9%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- (2) 耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤の連続散布を避ける。
- (3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値: 発生面積率10.8%、発病葉率1.1%)

[防除上の注意]

- (1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- (2) 窒素質肥料の多用は発病を助長するが、逆に少ないと草勢の低下を招くので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 摘除した罹病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- (4) ベと病やうどんこ病の発生後に激発することがあるので、本病以外の病害の発生に注意する。

4 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、11圃場のうち3圃場で微発生^(注)(葉当たり虫数0.5頭未満)が確認されている。

[防除上の注意]

- (1) キュウリ黄化えそ病(MYSV)が一部抑制栽培等で確認され、徐々に拡大傾向にあることから、今後、現在未発生地域やこれから栽培が始まる作型や他のウリ科作物への感染の拡大が懸念される。詳細については、平成22年度病害虫発生予察注意報第2号(8月19日発表)を参照のこと。
- (2) 最近、本病を媒介するミナミキイロアザミウマに対し、各種薬剤の感受性低下が確認されており、多発してからは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除する。
- (3) 本虫の土中や地表面での蛹化を防止するためのマルチ被覆や誘殺のための青色粘着板の設置等、総合的な防除対策を講じる。
- (4) 施設栽培においては、媒介虫の施設への侵入を防ぐため、開口部に0.4mm以下の防虫ネットを必ず設置するとともに、近紫外線カットフィルム等の物理的防除手段を利用する。

冬春ピーマン

1 斑点病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値：発生面積率2.5%、発病葉率0.1%)

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、除湿に努める。
- (2) 病原菌が侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値：発生面積率4.7%、発病葉率0.1%)

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- (2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

3 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬における花の見取り調査では、12圃場のうち4圃場で^(注)微発生を確認(平年25.1%)、10花当り寄生虫数は0.1頭(平年0.6頭)で平年より少である。
- (2) 芯での発生面積率61.5%(H21:38.5%、H20:71.4%)は前年より多く、50芯当り寄生虫数3.0頭(H21:3.2頭、H20:6.8頭)は前年と同程度である。

(3) 向こう1か月の気温は、高い確率50%と予想されており、本虫の増殖に好適な環境が続くと考えられる。

[防除上の注意]

(1) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また、多発してからは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底する。

(2) マルチ被覆や誘殺のための青色粘着板の設置により、生育密度の抑制に努める。

冬春トマト

1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認である。(平年の発生面積率:1.4%)

[防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。

(2) 発病初期の防除を徹底する。

2 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (前年と同程度)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の巡回調査では、12圃場のうち2圃場で微発生^(注)(発病株率0.5%未満)が確認されている。(発生面積率H21:0.0%、H20:10.0%)

(2) 本病を媒介するタバココナジラミ類は平年並の発生となっている。

[防除上の注意]

(1) 生育初期に感染すると被害が激しく全滅する場合もあるので、発病株はすぐに抜き取り、速やかに埋却等適正に処理する。

(2) 本病を媒介するタバココナジラミ類(タバココナジラミ バイオタイプQ、シルバーリーフコナジラミ)の防除対策については、施設野菜全般のタバココナジラミ類(2ページ)を参照のこと。

3 タバココナジラミ類(タバココナジラミ バイオタイプQ、シルバーリーフコナジラミ) (並)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の発生面積率41.7%(平年36.0%)、100葉虫数1.0頭(平年1.8頭)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

施設野菜全般のタバココナジラミ類(2ページ)を参照のこと。

冬春いちご

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の発生面積率15.4%(平年15.2%)、発病葉率1.4%(平年2.1%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

(1) 初め葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。

(2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。

(3) 発病果など被害部は、伝染源になるので早めに取り除き、ほ場内に放置しない。

2 炭疽病 (多)

[予報の根拠]

(1) 10月中旬の発生面積率46.2%(平年7.9%)、発病株率7.4%(平年0.6%)はい

ずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿にならないよう、ほ場の排水対策を十分行う。
- (2) 定植後に発病した株は、早期に除去し、新たな感染を防止する。
- (3) 親株床の発病残渣は翌年の伝染源になるのでほ場外に持ち出し適正に処分する。

3 ハダニ類 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値：発生面積率26.9%、寄生株率5.1%)

[防除上の注意]

- (1) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、密度が低い時点からの防除を徹底する。
- (2) ミツバチに影響のある農薬があるため、ミツバチを入れる前に防除の徹底を図るとともに、使用する農薬に留意する。
- (3) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。
- (4) ダニ剤散布時は、葉裏に良くかかるようにていねいに散布する。
- (5) 薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる農薬をローテーションで使用する。

4 アブラムシ類 (多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における発生面積率69.3% (平年29.3%)、寄生株率21.4% (平年4.7%) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、密度が低い時点からの防除を徹底する。
- (2) ミツバチに影響のある農薬があるため、ミツバチを入れる前に防除の徹底を図るとともに、使用する農薬に留意する。

かんきつ類(露地栽培)

1 ミカンハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率35.0% (平年43.6%)、寄生葉率8.8% (平年8.7%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除効果が劣るので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5~1頭を目安に、発生初期に防除を行う。
- (2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避ける。

茶

1 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率29.4% (平年33.8%) は平年並、寄生葉率1.3% (平年3.2%) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 気温が高いと生息密度が高まり、防除効果が劣るため、秋整枝後に防除し、越冬前の生息密度を低下させる。
- (2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統の農薬の連用を避ける。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

○ その他

1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤は使用しないこと。

3 発生量（程度）の区分

多い	（高い）	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	（やや高い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	（やや低い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	（低い）	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 （平年値は過去10年間の平均）

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- (2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。

ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp